『千葉大学 ユーラシア言語文化論』22（2020）：389-408

『オルドス民話収集』（4）
—銭世英著、1999 年、フフホト—

児玉香菜子訳

1．テキストについて

本テキストはペンネーム銭世英、モンゴル語名ジャガスが収集整理した『オルドス民話収集』（内蒙古人民出版社、1999 年）[1]に収められている民話 86 話の「人物の民話」34 話から 5 話を訳出したものである[2]。訳出した民話それぞれの末尾に原題と原著の頁番号および口述者の氏名（民族）、採集整理年を記した。民族は著者との関係と氏名表記から類推したものである[3]。これらの採録地は著者の出身地であるオルドス地域ウーシン（烏審）旗であろう（児玉訳 2016:121）。

今回訳出した 5 話のタイトルは「婿を取る」、「宿に泊まる」、「牧羊女の物語」、「金持ちと貧乏人」と「9 人の息子は石ころにも及ばない」である[4]。著書自体は中国語で書かれているが、この 5 話すべて著者が自身の両親から聞き取ったものであり、モンゴル語で語られたものを中国語に翻訳した可能性が高い。

2．民話 5 話の内容と特徴

第 1 話「婿を取る」の内容は、孤児になった少年ノミンダライがずる賢く裕福な主人の家に娘婿になるという約束の下、ただ働きさせられるところからはじまる。だが、そこの一人娘と相思相愛になり、それをいち早く察知した主人が主人公をはるか遠くやってしまう。最終的に主人公の知識教養によって主人に認められ、2 人は結ばれるというものである。ノミンダライというモンゴル名をもつ主人公はじめ、登場人物は皆モンゴル人であり、家畜の放牧、嫁入り道具の刺繍など、この物語の舞台はモンゴル社会である。他方で、ずる賢く裕福な家の主人は四合院を思わせるような立派な屋敷に暮らし、一人娘アラタも窓の切紙細工の紙に彫刻刀で手紙を彫るなど、中国文化を想起させる描写となっている。ここに読み取れるのは中国人的要素すなわち金持ち、さらにいうと、ずる賢さ、そしてモンゴル人すなわち善良で勤勉という対立的な構図である。これは第 2 話の「宿に泊まる」も同様で、正義感の強いモンゴル人がケチであくどい商売をしている宿の主人を頓智でもってやりこめる話である。宿の主人は主人公を「草原からやってきた」とののしっていることから中国人であろう。オル

---

[1] 原著名は『鄂尔多斯民间采风』。編者およびウーシン旗については児玉訳（2016）を参照のこと。
[2] 同著書にはほかに「動植物の民話」28 話と「神話物語」24 話があり、「動植物の民話」はすでにすべて訳出している（児玉訳 2016；2018；2019）。
[3] オルドスのモンゴル人の名前の漢語表記はモンゴル語名の音訳であることがほとんどである。
[4] 話の内容にあわせて訳者が掲載順を変更している。本来の掲載順は「婿を取る」、「金持ちと貧乏人」、「9 人の息子は石ころにも及ばない」、「牧羊女の物語」、「宿に泊まる」である。

ドスのモンゴル人は農耕地帯に囲まれるようにして暮らし、とりわけ清朝末期から中華民国にかけて中国人の激しい入植を受けて地域集団の政治的、経済的利益が著しく損なわれるようになっていた（楊 2020：259）。両話ともに漢人、中国人、中国という表現は一切出てこないが、民話の中に織り込まれたこのような民族的特徴を反映させた人物、背景描写はごく自然に受け入れられ、かつ、分かりやすく説得力のあるものであったであろう。

第 3 話「牧羊女の物語」は浅はかな女性の悲惨な末路を描いた物語である。だたし、最後にキツネとのやり取りが挿入されており、寓話的である。男性は狩猟、女性は家畜の放牧など、明らかにモンゴルの生活世界を題材にしているものの、モンゴルの食を代表するミルクティーと共に、焼肉というモンゴルでは一般的でない食事が出ている。編者の間違いかもしれない。

次いで、第 4 話「金持ちと貧乏人」は親孝行の息子の方が金銀財宝よりはるかに優れているという内容である。

第 5 話「9 人の息子は石ころにも及ばない」は第 4 話とは反対に親不孝な息子と嫁を描いた民話である。これはよく知られた漢人の民話である。にもかかわらず、この語り手は筆者の父親、つまりモンゴル人である。これまで訳出した「2 人のけちん坊」は漢人が主人公で、語ったのも漢人であった（児玉　2016:129-130）。この民話は漢人の民話がモンゴル人にそのまま伝わったもので、それもモンゴル語で語られているとしたら興味深い。

３．人物の民話

（1）婿を取る

昔むかし、イヘ・シベリ草原[5]にノミンダライという名の子どもがいた。彼の両親はともにとても善良な牧畜民で、父は大変賢く、一日も学校に通ったことはなかったけれど、独学でモンゴル文字に通暁していた。ノミンダライが言葉を習い覚えはじめる頃から、父は彼に読み書きを教え、5 歳の時にノミンダライはすでに簡単な手紙を読み書きすることができた。ところが、彼が 8 歳のときに不幸にも、急病で父母が相次いで亡くなった。それ以降、幼いノミンダライは身寄りも頼る者もなく、家々から食を恵んでもらい歩く乞食になった。

10 歳の時に、ノミンダライはチャグダルという金持ちの家に物乞いにやってきた。チャグダルは彼が非常に利口なのを見て、彼を長く家にとどまらせ、召使にしたいと思った。しかし、チャグダルは彼が成長してから自分に賃金を要求することを恐れて、妙案を思いついた。チャグダルは云う。

「そうだ。おまえさんはこんなに幼いのに四方をさすらっている。わしの家にとどまって婿になってはどうかね。おまえさんが我が家で 10 年働いて、もしいろいろな仕事をしっかりしてくれたら、10 年後にわしはおまえさんを婿に迎えよう。もし、10 年のうちに、怠けたりズルをしたら、そのとき

[5] オルドス地域ウーシン旗シャラウス河南岸に位置する（私信、サランゲレル教授）。

には暇を出すから立ち去れ。」[6]

当時、ノミンダライはまだ幼く、婿になることが何をすることか知らなかった。心のなかで、一杯のご飯を食べることができさえすれば何をしてもよいと思い、彼はうなずいて承諾した。

チャグダルはノミンダライが承諾したのを見て、顔に狡猾な笑みを浮かべた。彼は心の中で、このガキはこれから金のかからない作男になったと考えた。婿に迎える？考えが甘すぎる！その時になったらわしには目論見がある。いい加減な口実をつけて、あいつを家から追い出してやる！

チャグダルには一人娘がいた。名をアラタと云った。彼女はうまれつき麗しい容貌で、賢く、善良で、年はノミンダライと同じくらいだった。ノミンダライが彼女の家に来てから、彼女は彼がハンサムで、またとても誠実で、賢く、教養があって礼儀正しいのを見て、ひそかに彼に思いを寄せるようになった。彼女は一日中ノミンダライの後ろについて回り、チャグダル夫婦は可愛い娘に小さな友達ができたのを見て、心中喜んだ。

アラタは父が毎日四六時中ノミンダライにあれこれさせるのを見て、心中とても不満だったが、しかし、あえて干渉せず、いつも積極的にノミンダライのさまざまな仕事を手伝い、その仕事が終わるのを待っていた。また、ノミンダライが鞭を持って牧地にヒツジの群れを放牧に行くとき、彼女はいろいろな口実を見つけては家から牧地まで追いかけてノミンダライと遊んだ。このひとときは、いつも彼らにとって、もっとも楽しい時間だった。ノミンダライが間違いを犯すと、チャグダルはいつも彼を叩こうとした。そのとき、アラタは身を挺して、しきりに懇願し、もしくは、その過失の責任を自らにきせた。そうやって、ノミンダライが体罰の苦しみから逃れられるようにした。身寄りも頼る者もないノミンダライはアラタにとても感激し、すぐに心から彼女を好きになった。2 人の無邪気な少年少女は親友となった。ノミンダライが遠出して仕事をおえて戻ってくるときはいつも、アラタは遠くまで彼を出迎えた。冬のある日、アラタは家の後ろの丘の上に立ち、夕方から空が暗くなるまでノミンダライをずっと待ち続け、手は寒さで赤くなったが、それでも父母が家に戻って温まるように呼ぶのもきかなかった。ノミンダライは戻ってきてこれを知ると、いつもいとおしく思って襟をといて彼女の手を温めた。

ノミンダライは、普段口数は少なかったが、アラタと一緒にいる時だけはいつも語りつくせないほど云いたいことが出てきた。知らない人が見たら、皆彼らを双子の兄妹だと思った。

季節は移り変わり、またたく間に 7，8 年が過ぎた。女性は成長するたびにいくたびも容姿が変わる。アラタはすでにすらりとして美しい立派な女性になっていた。ノミンダライも凛々しくて、立派な一人前の男になっていた。2 人とも幼くて無邪気な親友同士に心の中にある種の特別な感情がめばえ、2 人は真に愛し合った。アラタはもう毎日ノミンダライのあとについて駆け回ることはなく、一日中ずっと自分の部屋にこもり、嫁入り道具に刺しゅうしていた。彼女は心を込めてノミンダライの

[6] 原文では会話により改行の有無にばらつきがある。本稿では会話文の場合はすべて改行に統一した。

ために黒いシルクのベストの縁に刺しゅうし、またブーツに雲の模様を刺しゅうした。巾着に鳳凰の尾を刺しゅうし、嗅ぎ煙草壺入れに赤いハスの花を刺しゅうした。縫って縫って一つ、また一つ縫った。ノミンダライも仕事にさらに精を出し、道を歩き出すと、2 本の足から風が起こり、仕事を始めると両手には光が生まれ、家を掃除すると塵一つなく、屋敷の中も外もすっかりきれいで、家畜も肥え太って立派に育った。

これらすべてについて、チャグダルは心中自ずと誰よりもよく分かっていた。ふとある考えが心に浮かんだ。彼は「婿に迎える」ということをウソから出た真にしたくなかった。彼はノミンダライが文無しだったのを嫌い、彼は宝物である娘を家柄がつりあう裕福な家に嫁がせたかった。

この日の朝、チャグダルはノミンダライを前に呼んで云った。

「仏様のおかげで、ここ数年我が家の家畜の数は年々著しく増えた。今、家の前の牧地はすでにわが畜群を養いきれなくなった。馬群を分けて、おまえさんに北のウラ山[7]に赴いてオトル[8]をしてもらうほかない。すべて準備してある。朝ごはんを食べたら、すぐ出発しなさい。いつ戻ってくるかについては、わしが人をやっておまえさんに知らせる。だが、わしからの言づてがなければ、絶対に戻って来てはいけない。」

ノミンダライは心中アラタから遠く離れがたがったが、チャグダルにあえて逆らわず、ただ馬群を追って出発するほかなかった。

ノミンダライが行ってから、アラタは毎日指を折って日にちを数え、ノミンダライが 1 日も早く帰ってくるのを待ち望んでいた。しかし、春が過ぎ、夏が来ても、秋が過ぎ、冬が来ても、やはりノミンダライは戻ってこなかった。1 年が過ぎ、2 年が過ぎ、3 年が過ようとしていた。しかし、以前としてノミンダライからの便りはなかった。彼女が父に聞いても、父は首を振り、彼女が彼を訪れようとしても、父は承知しなかった。彼女はいったいこれはどういうことなのか分からず、いつも一人自分の部屋の中に座り、やるせなく心を痛めていた。

ある夜、アラタが部屋から外に出て中庭を散歩していると、母屋に光がともっているのが見え、父がちょうど誰かと話し合いをしているところだった。彼女がそうっと近づいて行くと、父が話しているのがかすかに聞こえてきた。

「婚礼は 12 月 8 日[9]にしよう。おまえは婿の父親のガルディに云いつけなさい。妻を娶るとき・・・ノミンダライについて、おまえさん安心してください。とっくにわしははるか遠くのウラ山に行かせた・・・。」

ここまで聞くと、アラタは心が無数の針で刺されたようだった。ああ、こういうことだったのか。貧しいのを嫌い、金持ちを好む父よ、いわゆる家柄があうために、娘の幸せを顧みず、娘をガルディ

---

[7] 陰山山脈支脈。現バヤンノール（巴彦淖爾）市ウラド（烏拉特）右旗に位置する。
[8] オトルと呼ばれる家畜群の一部を分け、設営地から離し、別の放牧地へ赴く移動（利光 1983）。
[9] 陰暦 12 月 8 日釈迦成仏の日。

という裕福で、あのぶらぶら遊んで仕事をせず、悪事の限りをしつくしている目つきの悪い放蕩息子に嫁がせるなんて。このためにあろうことか、娘の意中の人をだましてはるか彼方に遠ざけ、一人きりで頼る者もなく遊牧生活を送らせるなんて、なんて残忍な父なのでしょう。こう考えると、激しい怒りが心のなかにわきあがった。彼女は家から逃げ出したかったが、前と後ろの門はどちらも鍵がきつくかけてあった。彼女は思わず自分の部屋に走って帰り、枕にふせてこっそりめそめそと泣いた。

このとき、家の大きな黄色い犬[10]がなれなれしく、彼女の手をなめた。まるで彼女の憂いを和らげようとしてくるかのようだった。アラタは目をきらりと光らせるとすぐに、顔にたちまち笑みを浮かべた。彼女は急いで戸棚から窓の切紙細工の紙と彫刻刀を探し出すと、自分の器用な手を使って、ノミンダライに手紙を彫り始めた。彼女は手紙にまず彼に 3 年来の恋しく思う気持ちを正直に書き記し、次に、父が自分を裕福なガルディの息子に嫁がせること、どうやっても 12 月 8 日以前に急いで戻ってくるように・・・と告げた。

手紙を彫り終えると、彼女は長もちからまた赤いシルクの布を 1 枚探しだし、手紙をしっかり包むと、大きな黄色い犬の首輪にきつく巻き付け、次に犬の頭をなでながら云う。

「急いでウラ山に行ってこの手紙をノミンダライ兄さんに届けて。」

大きな黄色い犬はだまって彼女を見つめると、身を翻して、家の門を走って出て行った。

ノミンダライはウラ山に行って以来、昼夜問わず、ずっと愛するアラタを思っていた。毎日ひたすらチャグダルからの彼に戻ってくるように、という連絡を待ちこがれていた。しかし、その希望はいつもはかなく散った。彼はこの極度の苦しみの中、1 日が 1 年のように長くつらく、この 3 年にも及ぶ千日あまりの日々をどのように乗り越えてきたのか自分でも分からない。この日、彼はいつものようにウラ山の頂上に座り南を遠く眺めていると、突然アラタ家の大きな黄色い犬が山道からまるで矢が飛ぶように駆けてくるのが見えた。

大きな黄色いイヌはぜぇぜぇ喘ぎながら、突然ノミンダライの体の上に飛びのると、前脚の爪を使って力を込めて自分の首輪を引っかいた。ノミンダライはすぐに理解し、急いでしばってある赤い絹の包みを解くと、なかの手紙を取りだし、慌ただしく読み始めた。読むにつれて、ノミンダライの手は震え、心はわなないた。ノミンダライは愛するアラタの自分に対する一途な思いに感激するとともに、同時にまたもうすぐ愛する人を失ってしまうことに居ても立っても居られなくなった。彼は慌ただしく長い口笛を吹くと、1 頭の黄色い駿馬が馬の群れの中から飛ぶように走ってきて、彼の傍らにとまった。彼は親しげにウマの頭をなで、背をたたくと、ウマに飛び乗り、イヘ・シベル草原へ矢が飛ぶように向かった。

12 月 8 日の明け方、チャグダルは家の内外で使用人に指図し、提灯をつるし五色の布で飾って花

---

10 『元朝秘史』のモンゴル民族の始祖アラン・ゴアが日月神を受けて、受胎する描写に、黄色い犬という表現が見られる。黄色は尊い色とされていた（鯉渕 1995:178-181）。

嫁を迎えにくる新郎の家の者の馬車を出迎える準備をし、嫁入りする娘の結婚の宴席を準備していた。ちょうどその時、突然1頭の黄色い駿馬が遠くからダダッと走ってきて、近づいてきた。そばに来ると、1人のハンサムな青年がさっそうとウマを降りた。チャグダルの面前に来ると、跪き、頭を地に打ち付けて礼をして、云う。

「娘婿が岳父さまに謁見します。」

チャグダルが目を凝らしてよく見ると、なるほどノミンダライで、思わず驚いて、聞いた。

「おまえはなぜ来たのか。」

「岳父さまが今日私とアラタを正式な夫婦にし、私を正式に婿に迎えると聞きました。私が急いで戻って来なくてよいということはないでしょう？」

「誰が今日おまえとアラタを正式な夫婦にすると云ったのだ？」

チャグダルは焦り、つかの間、なんといっていいのか分からなかった。

「あれ？岳父さま、10 年前あなたはご自分で私に対して私を娘婿にすると約束したのではないですか。あなたは私が10年間立派に仕事をしたら、娘を私にくれると云いませんでしたか？10年来、私はさんざん苦労をして、あなたの家のつらい仕事をしたことがないですか？まさかあなたが娘婿にすると云ったのはなるほどウソで、私をだましてあなたのただ働きをする作男にしたのですか？」

とノミンダライは意気込んでまくしたてた。チャグダルは自分に理がないことを分かっており、云う。

「おまえがわしの婿になりたいというのを許さないわけではない。ただし、3つの問題でおまえを試験する。もし、おまえが答えられたら、わしは娘をおまえにやろう。もしおまえが答えられなければ、娘を別の奴にやる。」

「やります！岳父さま、どうか出してください。」

このとき、ノミンダライには胸いっぱいの熱情が煮えたぎった。アラタのためにたとえ火の中、水の中へ赴くことも辞さない。

　チャグダルは少し考えて、云う。

「おまえさんよく聞きなさい。第1問、ラクダは十二支の特徴を持つ。最初から最後まで1つ1つ数え上げなさい。」

ノミンダライは即座に答えた。

　ネズミの耳
　ウシの蹄
　トラの歩く姿
　ウサギのくちびる
　竜の首筋

ヘビの目
ウマのたてがみ
ヒツジの毛
サルの尻
ニワトリのとかさ
イヌの太もも
ブタのしっぽ

チャグダルはノミンダライがすらすらと答えるのを見て、第2問を出した。
「宝物殿の中で呼び寄せても現れない七大珍宝と由緒ある古寺で求めても得られない八大珍奇な宝物は何だ？」
ノミンダライは堂々と答えた。
「宝物殿の中に呼び寄せても現れないのは―

一つ目の珍貴なものは高い山の上のこだま
二つ目の珍貴なものは滔々と流れる大河の大波
三つ目の珍貴なものは広々とした荒野の蜃気楼
四つ目の珍貴なものは濃い緑色の樹海のびゅうびゅうと吹く風の音
五つ目の珍貴なものは深い峡谷の夕もや
六つ目の珍貴なものは軽快に走る良馬の姿
七つ目の珍貴なものは意気盛んな勇士の雄叫び

由緒ある古寺で求めても得られないものは―

一つ目の宝物は野ウサギの角
二つ目の宝物は子ウシのむき出した牙
三つ目の宝物はカメの髭
四つ目の宝物は蚤の翼
五つ目の宝物は枯れ木の緑の葉
六つ目の宝物は井戸の底の乾いた砂
七つ目の宝物はトビネズミのしりがい[11]

[11] 家畜を轅につけて車を引かせるときに家畜の尻の周りにつける革製のベルト

八つ目の宝物は黒いヒツジの馬具

第2問もノミンダライを困らせることはなかった。チャグダルは焦って額いっぱいの汗をかきながら、第3問を出した。
「人間が推し崇める9つの清らかさと6つの美しいものを云いなさい。」
ノミンダライは落ち着いて答えた。

あまねく照りわたる万物の太陽の清らかさ
暖かで上品な月光の清らかさ
霊験あらたかな祈祷の清らかさ
天下にとどろく名声の清らかさ
誠心誠意の承諾の清らかさ
感情と道理に従った礼儀の清らかさ
新郎が花嫁を迎える道の清らかさ
嫁に行く花嫁の香しい足跡の清らかさ
美しく純真な愛情の清らかさ

耳は人をひきつける歌声を美しいとする
目は華麗できらびやか色彩の美しさを美しいとする
体は軽くて体に合った服装を美しいとする
山並みは草木が青々と繁る森林を美しいとする
草原は香りとあでやかさを競う花を美しいとする
心は誠実で謙虚なことばを美しさとする

狡猾でぬけめがなく、腹黒いチャグダルは本来3つの難題でノミンダライのぶざまな姿をさらし、求婚という考えを立ち切らせたかった。しかし意外にも1問もノミンダライを困らせることないどころか、自分を十分にばつが悪いと思わせるほどであった。話した言葉はまいた水のようで、取り返しができない。このとき、娘のアラタも走り出てきて、チャグダルの膝下に跪き、ノミンダライ以外とは誰とも結婚しないと誓った。
ちょうど話していると、ある人が叫んだ。
「早く見に来てください。ガルディ家の嫁を迎える馬の隊列が来ています。」
チャグダルは束の間どうしていいのか分からなかった。あわただしく家の者を呼んで、ノミンダラ

イとアラタに2頭の駿馬を用意し、いくらかの携帯食料と路銀を準備した。彼ら2人に急いでウマに乗って目の前に迫る窮地から逃れて、ウラ山で蜜月を過ごしに行かせた。

≪原典≫原題「招女婿」66-73頁。ウサラゴワ（著者の母、モンゴル人）口述　1992年収集整理

（2）宿に泊まる

バヤルという牧畜民がいた。彼はまっすぐな人柄で、剛直で気骨があり、一貫して悪を憎むこと仇敵を憎むがごとくであった。

ある冬のこと、バヤルは2頭のロバを連れて遠出をし、南山[12]に行き小麦粉と交換して戻って来ようと思った。道は遠く、道中人気はほとんどなく、暗くなってようやく道端の1軒の宿屋にやって来た。

丸一日歩いたので、大変疲れており、バヤルはしっかり休んで、明日また道を急ごうと考えた。聞いてみると、宿代は高くてびっくりするほどであった。しかし、四方荒れ果てて人が住んでいないことに思い至ると、他に選択肢はなく、その宿に泊まるほかなかった。そこで、宿主に云った。

「今晩おまえさんの宿屋に1泊しよう。私のためにオンドル[13]を温めてくれ。」

宿主はバヤルに尋ねた。

「おまえさんは私の宿屋のご飯を食べますか。」

「食べないよ。私は自分でほしいを持って来ているからね。」

と答えた。

バヤルは外に出て家畜を落ち着かせ、荷物を持って部屋に戻ってみると、部屋は寒く、オンドルも冷たく、まだ火を起こしていなかった。それで宿主に聞きに行った。

宿主は得意げに云った。

「宿屋ではですね、宿屋の規則を分からなくてはなりません。うちのこの宿屋には他とは異なる2つの規則があります。おまえさんはおそらく初めて遠方から来たのでよく分からないのでしょう。1つは宿屋でご飯を買った者だけが温かいオンドルに泊まる資格があります。2つ目は1斤（500g）のご飯を食べた人だけがオンドルに火をつけてもらえます。」

というのは、この宿主はお金儲けをするために、手段を選ばず、オンドルを作るのでさえ、知恵を絞っていた。オンドルすべてに火をつけるのではなく、オンドルの焚口をいくつかに分けて、オンドルの焚口に火をつけると、1人分の広さだけが温まり、他は氷のように冷たいままにしたのだ。同時

---

[12] サランゲレル教授によるとアルブス山ではないか、とのこと（私信）。アルブス山はオトク（鄂托克）旗北西部、黄河右岸に近くに位置する山脈。

[13] 中国語で「炕」。暖房設備。床下に煉瓦などを仕切った煙道を設け、焚口から煙を送り込んで部屋を暖める。

に、宿主は宿屋とともに食事も売っており、その値段も高くて驚くほどである。どうせ、地の利を占め、近くに村もなく、泊まる宿もないところなので、宿主は旅客が逃げてしまうことを心配することもなく、ただどのようにして一人一人の客からどれだけ多くの金を稼げるかを考えているだけだった。彼は1杯のご飯を1斤以上食べることができる人は多くなく、また1斤のご飯を食べることができない人が少なくないと見積もっていた。このように、宿屋は自分の店でご飯を食べない、もしくは1斤のご飯を食べない客にオンドルを付けず、薪を節約し、かつ手間を省き、うまいことをしているのはもちろんこの宿主だった。

バヤルは宿主の話を聞き、内心こいつの心は本当に汚いと思った。宿主が要求する宿賃は本来別のところよりも数倍も高いうえに、さらに様々な口実をもうけてはオンドルに火を入れない。これは明らかに地面が凍るほど寒く、夜なのに乗じた、疲れて飢えて寒さに震えている旅人への形を変えた、強盗ではないか。そこで、つまらなさそうに宿主をすぐに5斤のメンを持ってくるように叫んだ。

宿主は聞くと、喜ぶと同時に驚いて尋ねた。

「おまえさん、云い間違いではないかい？おまえさんは一度に5斤のメンを食べきれるのかい？」

「どうして云い間違えることあろうか。それに食べきれようが、食べきれまいが、おまえさんが心配することでない。早く私にオンドルをつけてくれ。」

宿主は心の中で急いでそろばんをはじき、ネズミのような両目を細めながらこっそり笑みを浮かべて、店員にバヤルにオンドルの焚口1つに火を入れるよう叫んだ。バヤルはしばらく待って、店員が彼に1つの焚口だけに火を入れたのを見ると、大変不服そうに、何も云わずにまた宿主を訪ねて道理を説いた。

「どうして焚口1つだけにしか火を入れないのだ。」

「おまえさんは1人ではないですか。」

「おまえさんは、宿屋の規則では宿屋のご飯を食べたらオンドルを温めてくれる。毎食1斤食べることができたら、オンドルに1つ火を入れると云わなかったかい？いま、私はおまえさんに5斤のメンを注文したのに、なぜ私にオンドルの焚口1つだけにしか火を入れてくれないのだ？」

2人はしばらく云い争った。宿主はバヤルが一歩も引かない頑固者であるのを見て、譲歩するほかなく、ぷんぷん怒りながら使用人を呼び出し云いつけた。

「草原からやってきたこの馬鹿な若造のために、焚口4つに火をつけてやれ。」

しばらくして、5斤のメンが出来上がった。バヤルは自分で1斤食べると、残りの4斤を彼の2頭のロバに与えた。そのあと、彼は何も云わずに、2 頭の小さなロバを客室に引っ張って来て入れて、オンドルの上にちょうど駆り立てるとき、宿主が慌ててやって来て問いただした。

「おまえさんという人はいったい何なのだ？」

宿主は大変怒って、大声で怒鳴って云った。

「何だって？私が何だって？」
バヤルは真面目に言い返した。
「草原からやってきたこの馬鹿な小僧め。大胆にもロバを俺さまの客室に連れてくるとは！」
「えっ、私は何事かと思いましたよ。おまえさんは、宿屋の規則を理解する必要があると云いませんでしたか。おまえさんの宿屋の規則ではおまえさんの宿屋のご飯を食べた者は暖かいオンドルに泊まることができると、おまえさんは云いませんでしたか。今日、私の 2 頭のロバもあなたの宿屋のご飯を食べました。しかも、1 頭ごとに 1 斤食べただけではありません。どうして温かいオンドルに泊まることができないのでしょうか？」
「この、、、この、、、」
宿主は怒りで言葉が詰まり、顔を真っ赤にした。
2 人は言い争いを止めず、お互い譲らなかった。県役所に訴えを起こした。県長官はこの話を聞くと思わず声をたてて笑った。笑い終えて考えると、その中の道理を悟った。直ちに、宿主に今後料金をとりすぎないよう、勝手放題にだまして金を巻き上げるようなことをしないよう叱りつけた。さらに 2 百両の銀を罰金として科して戒めた。

≪原典≫原題「住店」83-85 頁。バーバー（著者の父　モンゴル人）口述　1989 年収集整理

（3）牧羊女の物語

若く美しい牧羊女と彼女のハンサムでたくましく、騎馬が得意で狩りが上手な夫はサイハンタラ[14]では広く評判の仲の良い夫婦だった。
ある年の夏、彼ら夫婦は 2 人そろって馬に乗って、ゲルを携え、羊の群れを追いながら、アルブス山のふもとにオトルにやってきた。ここは山もあり水もあり、草が繁茂し、鳥や動物がときに隠れ、ときに現れ、まさにヒツジの放牧にとってよい牧地であり、狩りにとってよい猟場であった。夫婦 2 人はここに着くと、毎日朝早く出かけて、夜遅く戻って来て、1 人は忙しく獲物の後を追って狩りをし、1 人は自由に放牧していた。夜戻ってくると、脂がのっておいしい焼き肉を食べながら、香り高いミルクティーを飲み、楽しげな声や笑い声が満ち、生活はとても愉快だった。
ある日、牧羊女が放牧しながらとても静寂な山の入り口にやってくると、突然山の中で人の歌声が聞こえてきた。その歌声は低く穏やかで悲しく、とても感動的だった。牧羊女はヒツジの群れが頭を低く垂れておとなしく草を食べているのを見ると、よく繁茂した草むらを選び、草むらの上に気持ちよさげに横になった。目を閉じて夢のように酔いしれて、山の中から聞こえてくる歌声に耳を傾けて

[14] オトク旗にサイハンタラ（賽罕塔拉）・ガチャー（嘎查）があり、ここだと思われる（私信、サランゲレル教授）。サイハンタラは美しい草原の意。ガチャーは内モンゴル自治区の行政区画単位で、末端の行政区画名称。

いた。
　ほどなくして、一人の若くハンサムな王子が牧羊女のそばにやってきて、美しい花束を彼女に献じ、礼儀正しく、云った。
「私は大山の歌仙王子です。山の中には私の華麗で立派な宮殿があります。どうか私といらしてください。あなたさまは私の美しい皇后さまです。」
そう云いながら、さっと彼女の手を撫でながら、心を込めて歌を歌い始めた。その歌声はまるで芳醇な美酒のように彼女の心に入っていった。1曲歌い終わると、王子は彼女の手を引き寄せると熱狂的にキスしはじめた。目を覚めして見ると、それはいたずらな子ヒツジがちょうど彼女の懐の中でじゃれ遊びながら、彼女の手にキスをしていた。
　それ以来、牧羊女は深い山の中に本当に一人の王子がいて彼女を呼んでおり、待っていると思い込んだ。彼女は毎日その神秘的な山の入り口に行き、ヒツジを放牧し、夢の中の「歌仙王子」に狂ったように夢中になった。「王子」の歌声を聞こえない日があると、心が悶え乱れた。
　このようにして一日、一日が過ぎていった。瞬く間に夏は過ぎ、秋が来て、天気は少しずつ涼しくなってきた。若い猟師は荷物の整理をはじめ、「オトル」を終わらせる準備をし、牧羊女と一緒に羊の群れを追って故郷のサイハンタラに戻って冬を越そうとしていた。だが、牧羊女は云った。
「おまえさん一人で戻りなさい。私はここに残ります。」
「どうしてだい？」
夫は不思議に思い、牧羊女に聞いた。彼女は包み隠さず答えた。
「私の胸中には既に別の人がいます。」
「おまえは何を云っているのだ？」
　夫は信じず、自分が聞き間違えたと思った。牧羊女が事の経緯を一つ一つ話して聞かせても、まだ半信半疑だった。
「おまえさんたちは会ったことがあるのかい？」
「まだないわ。と云っても、彼の歌声は一夏中私とずっと一緒だったわ。」
　狩人はどうして愛する妻を手放すことが惜しくないだろうか？彼は口をすっぱくして極力彼女に思い直すように忠告した。
「一人の一度も会ったことがない人なのに、おまえさんは彼が必ずおまえさんによくしてくれるとどうして分かるのか？」
「安心して！私は私の感覚を信じるわ。たとえ王子でなかったとしても、きっともっとも秀でた男性よ。」
　狩人の心はすぐに砕けた。しかし、彼はやはり牧羊女を心配し、云い含めた。
「このようであるからには、おまえは行けばいい。ただし、思い通りに行かなったから、すぐに帰っ

てくるのだ。俺はおまえを待っている。」

「過ぎたことに恋々としない[15]。」

このとき、牧羊女はどんな忠告も耳をかさなかった。

狩人はただ涙を流して牧羊女に別れを告げ、駿馬に乗り、一人ヒツジの群れを追って故郷に帰って行った。

牧羊女は夫が去るとすぐ、一切を顧みず深い山を目指し、彼女の意中の「王子」を探しに行った。あのよく知っている歌声に導かれて、彼女は暗くじめじめした山の洞窟にやってきた。目が洞窟の中の光に慣れると、牧羊女はあっけにとられた。洞窟の中に全身が崩れただれて、髪はまばらで、眉は抜け落ち、まさに息絶えんとしている男が一人横たわっていた。もし彼がまだ動くことができ、目にまだ一筋の希望の光がひらめいたのを見なければ、まるで腐った死体だと思った。牧羊女は驚いて数歩後ずさりし、しきりに身震いした。彼女は前夫の忠告に従わなかったことを後悔した。

世の中に後悔に効く薬は売っていない。牧羊女はやむを得ず残るほかなく、この息絶え絶えの「王子」の世話をした。

しばらくして「王子」はこの世を去った。

みじめな中、牧羊女は再び前夫の恩徳を思い出した。このとき彼女はようやく前夫がもっともたくましく、もっとも勇敢で、もっとも善良で、最も秀でた男性であることに思い至った。彼女はまた彼を訪ねることにした。結果、故郷に戻る途中で、猟師がすでに大変美しく、善良な娘を娶ったことを耳にした。彼女は怒ると同時にまた恨んだ。しかし、考えてみると、自分こそまず無情にも彼を見捨て、しかも毒のようなことばで狩人の心を傷付けたのだ。自分は彼に合わせる顔がないと思った。牧羊女が頼って行くところもないところに、どこからともなく強盗団が逃げて来て、牧羊女の荷物と着ていた衣類を全部剥ぎ取って奪っていった。丸裸の牧羊女は人に会うことができず、ただ草を編んで作ったむしろを体の上にかけて恥ずかしい醜い姿を隠すほかなかった。一日中森の中に隠れていて、お腹が空くと、野生の果物を食べ、のどが渇くと、川の水を飲み、身寄りもなく、一人ぼっちで寂しく、みじめな生活を過ごしていた。

ある日、彼女がちょうど川辺にしゃがんで手で水を飲もうとしたとき、突然後ろで物音が聞こえた。それで彼女はあわてて生い茂るアシの草むらの中に隠れた。気を静めてこっそり様子を伺うと、一匹のキツネが大いばりで川辺にやってきたことに気が付いた。

風穏やかに日うららで、澄み切った河川水がキラキラと波が光る中、一匹の小魚が自由気ままに尾ヒレを揺らしながら、川辺に泳いできて、ちょうで川辺で待ち受けていたキツネに捕まってしまった。

キツネが得意げに口にくわえた小魚をまさに飲み込もうとしたとき、遠くから 1 羽の白鳥が飛んで

---

[15] 原文は「好马不吃回头草」。良馬は頭をめぐらして、自分の踏んできた方の草を食うようなことはせぬ。

きた。白鳥は飛ぶのが低く、キツネの頭の上を斜めにかすめるその瞬間、キツネは欲深く飛びかかり、5 尺（約 1.6 メートル）飛びあがって、口を開けてその白鳥を捕まえようとした。思いがけず、白鳥は捕まらず、すでに口に入った小魚も川の中に落ちて逃げた。

牧羊女はこの一部始終を見て、こらえきれずに笑った。彼女は草むらの中から頭を出してキツネに対して云った。

「おまえさんキツネは本当に貪欲できりがないわ。口で食べながら、また上空のものを得ようとするなんて。結果はどう？白鳥の肉も食べられず、口に入った小魚も逃げた。本当に竹籠で水をくむようなものね。そして何も手に入らない！」

キツネは聞き終わると、潔よしとせず、牧羊女をじろりと流し目に見ると、冷ややかに笑いながら云った。

「へへ、おまえさんはわしをあざ笑えるのかね。おまえさんは自分の成れの果てがわしよりもっと悲惨だと思わないのかい？」

≪原典≫原題「一个牧羊女的故事」79-82 頁。バーバー（著者の父、モンゴル人）口述
1988 年収集整理

（4）金持ちと貧乏人

昔むかし、1 人の金持ち[16]がいた。彼はとてもたくさんの金銀を持っていた。1 人の貧乏人[17]がいた。金も銀もなかったが、勤勉で善良な 4 人の息子がいた。

この金持ちは、自分は財力があると思ってふんぞり返っていて、何かというと貧乏人の前で自分がいかに金持ちかをひけらかしていた。そのうえ、いつもわがもの顔に振る舞い、貧乏人を馬鹿にしていた。

ある日、金持ちがまた貧乏人の前で自分がどんなに金持ちかをひけらかしていた。貧乏人は内心大変不満に思い、わざと金持ちをからかって云った。

「おまえさんはとてもたくさんの金銀財宝があるが、それらは皆死んだ宝だ。わしには金銀財宝はないが、かわりに自らわしをいたわり、疲れたら肩をたたいてくれ、心配事があるときは気晴らしをしてくれ、病気になれば薬を買ってきてくれる、生きた宝がある。」

金持ちはこれを聞いて、あわてて問い詰めた。

---

[16] 原文は「巴音洪（ba1yin1hong2）」で、これはモンゴル語で金持ちを意味するバヤンフン（*bayan xömün/xümün*）を漢語で音訳したもの。モンゴル語表記は内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所（1999）による。以下同。

[17] 原文は「雅都洪（ya3dou1hong2）」で、これは貧乏人を意味するヤドーフン（*yaduγu xömün/xümün*）を漢語で音訳したもの。

「おまえさんは本当に生きた宝を持っているのか？いくつだ？どこだ？」
貧乏人は自分の息子を指さして云う。
「4 つ。皆ここにある。」
　金持ちはこれを聞くと、口をゆがめて笑って云った。
「わしはまた何が生きた宝かと思ったよ。数人の貧乏人か。何の役に立つのか。」
　2 人の言い争いが止まらず、どちらも納得しなかった。
　貧乏人が云った。
「わしの生きた宝はおまえさんの死んだ宝より優れているとわしは断言する。信じないなら賭けをしよう。」
「するというのならしよう。おまえさんが先にどんな賭けをするのか云いなされ。」
　ちょうどまさに寒[18]だった。貧乏人は少し考えて云った。
「寒の中で一番寒い日に野宿をし、一晩どちらの宝物が保護してくれるか、賭けよう。凍死しないほうが持っている宝がつまり生きた宝物だ。」
　金持ちは聞き終わると笑った。彼は次のように胸算用した。「こいつは貧しくて寒の中でも単衣の着物すら着ることができない。あえて野宿するだと？おまえさんが凍って乾いた棒のようにならないほうがおかしい！」
　賭けが始まった。金持ちは犬皮のズボンをはき、狐皮のコートを羽織り、頭には狼皮でできた帽子をかぶった。さらに、とてもたくさんの金銀を運んできて、これら金銀財宝で小屋を築き、得意げに潜り込んで寝た。寝しなに頭を突き出して貧乏人に向かって云った。
「おまえさん何か云うことがあるのなら、とっととおまえさんの貧乏人たちに仕事をあてがってやりなさい。おまえさんの『生きた宝』におまえさんの骨を拾うようにね。」
　貧乏人は薄着だったが、息子たちが彼のために築いた乾草の小屋の中に横になった。4 人の息子たちは四方から焚火を焚き、彼のために暖を取った。貧乏人も笑いながら頭を出して金持ちに向かって云った。
「おまえさん、何か云うことがあるなら早くおまえさんの宝物に仕事をあてがってやりなさい。だが、彼らはおまえさんの骨を拾うことができないのが心配だね。」
　夜半まで眠ると、金銀は凍ってまるで氷のように冷たく、金持ちは寒くて何度も寝返りをして寝付けなかった。夜明けを待たずに寒くてまさに息絶えんとしていた。貧乏人の 4 人の息子は絶えず彼のために薪をたし、焚火をした。燃えさかる 4 つの焚火は貧乏人をぽかぽかと気持ちよく休ませ、夜が明けるときにはまだしきりに体から湯気が立ち上っていた。

---

[18] 冬至の次の日から 81 日間をいう。

≪原典≫原題「巴音洪和雅都洪」74-75 頁。ウサラゴワ（著者の母、モンゴル人）口述
1988 年収集整理

（5） 9 人の息子は石ころにも及ばない

昔むかし、1 人の老人がいた。この老人には 9 人の息子がいた。妻が早くに亡くなったため、この老人は父親にも母親にもなって、9 人の息子を小さな時からうんちやおしっこの面倒を見て自分の手で育てあげた。9 人の息子が成長すると、それぞれ嫁をもらってやった。1 人嫁をもらうたびにお金を使い、家を分けるたびに、財産を分けてやった。9 人の息子に嫁をもらい、9 回家を分け、すべての蓄えを使い果たした。分けることができる家具財産は皆分けてすっからかんである。残されたかわいそうな孤独な老人の骨を欲しがる人はいない。

一人ぼっちで頼るところがない老人はいたるところから風が吹き抜ける一部屋しかないぼろぼろの藁葺き小屋に住んでいた。病気になると、冷たいオンドルの上に眠るほかなかった。だが、9 人の息子も 9 人の嫁も一人としてこの老人を見に来ることが少しもなければ、ましてやこの老人に一杯のご飯や一杯のお湯を沸かしてくれる人もなかった。

人は常々「老後のために子どもを育てる」というが、石を拾うことで老後に備えることができると誰が聞いたことがあろうか。老後のために、この老人はある考えを思いついた。彼は体の調子が少し良いときを利用して、こっそり出かけてたくさんの石を拾って帰ってきて、赤い布で 1 つ 1 つしっかりと包み、7，8 個の壺に分けていっぱいにした。そのあと、丁寧に布で、壺の口を密閉した。戸口の後ろと焚口にいくつか穴を掘り、しっかりと封をした壺を埋めた。

老人は毎日乞食をし、雨の日も風の日も出かけ、おなかを空かせ、服は破れて寒く、ついに動けなくなり、オンドルに横になり起き上がれなくなってしまった。隣に一人の老いた男がおり、この老人が何日も外に出てこないのをみて、走って彼を見に来た。老人は云った。

「ああ、わしは年を取った。病気だ。オンドルから下りられなくなってしまった。おまえさん、ちょうどよいときに来てくれた。頼みたいことがあるのだ。手伝ってくれないか。いいだろうか。」

隣の家の老人は云った。

「ダメなことがあろうか。」

老人は云った。

「わしはこの部屋の地面に 7，8 個の壺を埋めた。おまえさん、わしのために戸口の後ろに埋めてある壺を 1 つ掘り出してくれ。」

隣の家の老人が戸口の後ろをしばらく掘ると、案の定、壺を 1 つ掘り出し、骨を折ってオンドルのへりの上に抱えてのぼってきた。

老人は隣の家の老人の目の前で、壺の閉じた口を開け、手を伸ばして布で包まれた丸いものを 1 つ

取り出し、わざと手のひらの上に乗せて、上下させ、また壺の中にしまい、壺の口をまたきつく閉じて、云った。

「わしは一生涯でまだこの固いものを少しばかり稼いだ。本当のことを云うと、これら固いものを息子たちに分けていない。それは老後のためだ。面倒だと思うが、わしのためにあの息子たちに知らせてくれないか。おまえさんたちは結局わしの身の回りの世話をするのかしないのかとわしが聞いていたと。世話をするのなら、このいくつかの壺の固いものは世話をしてくれる子どもたちが使うように残そう。世話をしないのなら、わしは自分で人を雇って自分の世話をしてもらうのに使って十分ではないか。」

当時、地元の人は金銀財宝を「固いもの」と暗示するのを好んだ。

9 人の息子と嫁は老人がまだいくつかの壺に入った「固いもの」を持っていると聞くと、たちまち大喜びし、先を争って云った。

「私たちの老人を私たちが世話をしないで誰がするのだ？」

すぐさま 9 人の息子と嫁はわっといっぺんにぼろぼろの藁葺き小屋に押しかけてきた。老人はうれしくもあり、悲しかった。そして云った。

「皆よく来てくれた。ちょうどわしの地面にはあるものがある。おまえさんのうちで誰か掘り出してくれるかい？」

9 人の息子はこれを聞くと、遅れまいと先を争って掘り始めた。ここに 1 つ、あそこに 1 つ、老人が指すところに従い、しばらくして 6，7 つの壺が掘り出された。9 人の嫁たちは皆あっけにとられていた。

老人は息子たちに壺を老人の前に抱えて持ってこさせ、ふたを開けるように命じた。9 人の息子たちは争って壺を抱えて老人の前に持ってきて、よって、たかって壺の口を開けた。老人は震えながら手を伸ばして入れて、1 つ 1 つ布で包んである石を撫でて、また息子たちに壺の口をよく締めさせ、老人の後ろのオンドルの隅に置かせると、ようやく安心して眠りについた。

このあと、とてもにぎやかになった。9 人の息子たちはどいつもこいつも老人に孝行し、9 人の嫁たちも、どいつもこいつもまめまめしく、かいがいしく接した。走って家に戻り小麦粉をこね、餃子の中身を刻み、餃子を包む者もいれば、餃子は脂ののったおいしい羊肉に及ばない、と云う者もいる。そして、戻って特別に太ったヒツジを解体する。老人は羊肉を食べない、メン[19]が好きだと云う者もいる。あちらには、メンより餅菓子が美味しいと云う者もいる。9 人の嫁は毎日三食メニューを変えて老人に食事を作り、何が美味しいと分かれば、家に戻って捧げて持ってくる。9 人の息子たちは少しも老人の部屋から離れず、父の足をもんでやるものもいれば、父の肩をたたくものもいる。このようにして、大変良く老人の身の回りの世話をし、最後の息を引き取るまで父親は孝行を受けた。

---

[19] 杂面。陝西省の郷土料理で、緑豆で作ったメン。

老人が亡くなってから、兄弟たちは先にすべての壺を 1 つの櫃の中に入れて鍵をしっかりかけた。相談して、先に老人を埋葬し、その後に金銀財宝を分けると決めた。

櫃に鍵をかけた後、嫁たちは鍵がちゃんと閉まっておらず、兄弟たちの誰かに壺を盗まれるのを恐れ、皆 1 人ずつ鍵を 1 つ持ってきて、櫃に鍵をかけ、十何個もの鍵になった。嫁たちが一人ずつ鍵を持ち、これでようやく皆安心した。

老人を埋葬し始めた。兄弟たちはまた協議し、1 番多く出した人が、もらう金銀が多いと決めた。そこで、兄弟たちはまた遅れまいと先を競って往来し、木材や布を持ってきた。最終的に、棺桶は柏木で作られ、死装束は何着にもなった。

老人を立派に埋葬し、兄弟たちはあわただしく戻って財宝を分けようと、櫃を開けてみると、7，8 個の壺に入っていたのは皆石ころだった。石を包んだ布の上に順口溜[20]が 1 首書いてあった。

9 人の息子は石ころに及ばない
石ころは 9 人の息子を引き寄せることができる
もし石がなかったら
老人はとっくに餓死していた

9 人の息子は読み終わると、がっかりし、気を落として去っていった。

≪原典≫原題「九子不如石子好」76-78 頁。バーバー（著者の父、モンゴル人）口述　1988 年収集整理

謝辞

原著は翻訳者が 2001 年ウーシン旗でフィールド調査中に入手したものである。寄贈者に心よりお礼を申し上げる。地名についてご教示いただいた中央民族大学サランゲレル教授に深くお礼を申し上げます。翻訳は中国・朝鮮言語文化論演習で進めた。ゼミ生およびティーチングアシスタントのスルナさんにも感謝の意を記したい。

引用文献

鯉渕信一（1992）『騎馬民族の心―モンゴルの草原から』日本放送出版協会。
児玉香菜子訳（2016）「オルドス民話収集（1）銭世英著、1999年、フフホト」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』18:121-140。
――（2018）「オルドス民話収集（2）銭世英著、1999年、フフホト」『千葉大学ユーラシア言語文

[20] 民間芸術の一種。話し言葉による韻文。長さは一様ではない。非常に語呂がよいのが特徴。

化論集』20:323-339。
――（2019）「オルドス民話収集（3）銭世英著、1999年、フフホト」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』21:181-199。
利光有紀（1983）「"オトル"ノート：モンゴルの移動牧畜をめぐって」『人文地理』35(6):68-79。
楊海英（2020）『モンゴルの親族組織と政治祭祀―オボク・ヤス（骨）構造』風響社。

銭世英（1999）『鄂尔多斯民间采风』内蒙古人民出版社。
内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所（1999）『蒙漢詞典』内蒙古大学出版社。

（こだま　かなこ・千葉大学人文科学研究院）

Collections of Ordos folktales (4): Qian Shiying, 1999, Huhhot

KODAMA Kanako

This text is a partial translation of “Ordos Folklore Collections” (published by Inner Mongolia People’s Press, 1999). The original title is “鄂尔多斯民间采风 (Eerduosi minjian caifeng)” by Qian Shiying. The original manuscript was written in Chinese. This book contains eighty-six folktales collected in the Ordos district of the Inner Mongolia Autonomous Region, China, and arranged by the author. The folktales fall into three categories: folk tales about animals and plants (28), folktales about people (34), and myths (24). I translated five folktales about people. “Taking up a son-in-low” and “Staying at a motel” describe Chinese as cunning. On the contrary, Mongols as goodness and diligence. “Shepherdess” is a kind of fable. The topic of “Rich man and poor man” and “A stone is better than nine sons” is about filial piety.